



如来坐像

パキスタン・ガンダーラ | クシャーナ朝・2~3世紀
片岩

Buddha

Gandhara, Pakistan | Kushan dynasty, 2nd-3rd century
Schist

如来坐像

巴基斯坦 犍陀罗 | 贵霜帝国 2-3世紀

여래 좌상

파키스탄 건타라 | 쿠산 왕조 2~3세기

TC-80

頭の後ろの円形は後光の表現で、神聖で偉大な神や人物の背後に表わされています。円形中向かって右にインドラ（帝釈天）、左にブラフマー（梵天）とみられる古来信仰を集めたインドの神が、釈尊に礼拝する姿を浮き彫りしています。釈尊がもっとも優れていることを意味するのでしょう。

The two figures inside the Buddha's halo are the Indian deities Indra and Brahmā, who were incorporated into the Buddhist pantheon. They are shown worshipping the Buddha, an act reflecting his exalted status.

此像头后的圆光是表现神圣伟大的神明或人物时所用。圆光中右侧是帝释天，左侧是梵天，二者呈向释迦礼拜之姿，表现释迦是最为神圣的存在。

후광을 상징하는 머리 뒤의 원형은 신성한 신이나 인물에 주로 나타납니다. 오른쪽에는 인드라(제석천), 왼쪽에는 브라هما(범천)로 보이는 인도의 신이 석가모니를 예배하는 모습을 새겼습니다.

このコーナーでは、2世紀から5世紀のガンダーラ(パキスタン北西部)とマトゥラー(インド北中部)の仏像を中心に紹介します。古代インドでは、仏教・ヒンドゥー教・ジャイナ教などの様々な神像の類いが作られ、彫刻として多様な展開をとげました。その中心となったのが、仏教の開祖である釈尊をはじめとする仏像です。仏像は、釈尊の死後500年ほどたった1世紀中頃から、マトゥラーとガンダーラでほぼ同時に作られるようになりました。ガンダーラの仏像はギリシャ系の西方文化の影響が顕著で、彫りの深い顔立ちと写実的な表現がなされています。一方マトゥラーの仏像はインド古来の土着的な様式が主流で、はつらつとした表情、豊満な身体表現が特徴です。古代インドの多彩な彫刻群をお楽しみください。



